

平成30年度山梨県南都留地域教育フォーラム提案書

第4分科会
特定非営利活動法人かえる舎 代表理事
慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員
齋藤和真

「高校生が地域に向き合い、考え、伝える」
富士吉田市の郷土愛醸成事業を事例として

1. はじめに

魅力ある教育とは、例えば、生徒たちに本物の「生きる力」を育むための、地域の「ひと・もの・こと」を活かした教育活動ではないでしょうか。また、生徒一人一人の人生の進路選択に丁寧に立ち合い、それぞれの自己実現に向けて精一杯支援していく、個性と多様性を尊重するキャリア教育ではないでしょうか。より良い教育の実現として多くの高校では、地域課題解決型学習などを通じて、高校生たちが地域に対する理解を深め、地域の魅力を再発見し、大胆で柔軟な発想で地域づくりの具体的な提案や実践を行うなど、自ら課題を発見し、他者と協働して取り組む力を育んできています。また、その学びの上に立って、どのように地域・社会・世界と関わりよりよい人生を送るかを自ら考え判断し、主体的にキャリアを切り拓くことができる力を育てようとしています。言い換えれば、「主体的に課題を見つけ、さまざまな他者と協働しながら、答えのない課題に粘り強く向かっていく力」のことです。

2. 背景

<社会の成熟>

従来は、経済成長を続ける大量生産大量消費の時代でした。しかし、現代はAI化が進むなど、情報化グローバル化が進み、社

会の複雑化が進んでいます。テクノロジーの進歩がもたらしたボーダーレスな成熟社会では、今までのように、早く正確に情報を処理する能力よりも、自ら課題を発見し知識、情報を活用しながら、多様な人々と創造的に取り組んでいくことが求められます。こうした社会の急速な変化に対応した学びを実現するには、地域社会に開かれた学校づくりを進め、多様な人々と関わりながら学ぶことができる魅力ある教育環境づくりが重要となります。

<地方創生へ>

ローカルアベノミクスから地方創生へと話がされてもう5年は経ちます。昨今の「地方創生」のモデルと言われるような、地域資源を生かした事業や産業を起こしている地域や、特色ある施策やブランディングで移住者を集めているような地域を見てみると、その地域に何か特異な地域資源や特別便利な交通事情があったからではないことが分かります。その地域に何か特別な「もの」があったという理由よりも、地域に対しての愛着や当事者意識、主体性や創造性を持った「人」がいるということ、課題解決に向けた知恵を出し、さまざまな人と協働し、粘り強く動く人たちがいるということが大きな要素

となっています。「地方には働く場がないから、若者が帰らない」とよく言われていますが「意欲ある若者がいないから、働く場(事業や産業)が生まれない」という側面も一方であるようです。

持続可能な地域を作るために、中央から地方に「金」や「仕事」を取ってこようとするだけでなく、地域で自立できる人を、地域で生業や仕事、事業、産業を作りだしていける人を育てていくことが重要です。短期的に成果が見えやすい人、金、仕事の誘致に比べて、次代の人づくりは効果が現れるまでに時間がかかります。時間がかかるからこそ、早くに、魅力ある人づくりに地域全体で着手していかないと、手遅れになっていきます。

3. 特定非営利活動法人かえる舎

特定非営利活動法人かえる舎(以下かえる舎)は2016年に学校と地域の橋渡し役となるべく設立した団体です。地域を舞台に、地域を大切にしながら、課題解決型の授業プログラムを構築しています。

<かえる舎の事業沿革>

▼2016年度

- ・山梨県立富士北稜高校での総合的な学習の時間プログラム構築
- ・北稜高校での地域課題解決型課外活動サポート

▼2017年度

- ・山梨県立富士北稜高校と富士吉田市で連携協定を締結
- ・富士吉田市ふるさと納税推進室と富士北稜高校との連携事業(ギフトカード)
- ・富士吉田市まちづくり課と富士北稜高校との連携事業(情報発信)
- ・富士北稜高校総合的な学習の時間、総合

ビジネス系列情報コース課題研究授業プログラム構築

▼2018年

- ・富士吉田市と山梨県立富士北稜高校の連携事業(総合ビジネス系列情報コース、総合的な学習の時間、建築デザイン系列)
- ・富士吉田市郷土愛醸成事業「かえる組」
- ・山梨県立甲府商業高校マーケティング部サポート事業

<かえる舎の事業スキーム>

▼ステップ1 授業前

1. 学校、地域と一緒に事業構築
2. 評価の目的と方法の設定
3. カリキュラムとスケジュール作成
4. 役割を明確にして授業に備える

▼ステップ2 授業実施

1. 興味をもつ
2. 知る・学ぶ
3. 実践する
4. カタチにする
5. 伝える
6. 振り返る

4. 事例

「地域の良さを感じ、考え、伝える」
＝富士吉田の水の良さを考え直す＝

▼背景

生徒が都内へ進学、就職して一番感じる地域の良さは水の美味しさだと言います。みんなが普段は当たり前な水も、外の地域からしたら、お金を払ってでも買いたい貴重な水です。そんな地域の資源を、もう一度見つめ、何か自分たちなりの形で伝えられないかなと活動を開始しました。

▼対象生徒

富士吉田市郷土愛醸成事業かえる組（富士北稜高校25名、吉田高校3名）

▼目的

地域資源を見つめなおし、それを自分たちなりの伝え方でプロモーションしていき、様々な人に水の良さを伝える。

▼手法

卒業生たちからヒアリングをしていると「コーヒーや味噌汁にした時に味の違いをよく感じる」ということがわかりました。そこで、生徒たちと、味噌汁を自分たちで作って、それを伝えていくのはどうだろうという話になりました。自分たちで味噌を作り、富士吉田の水と甲州味噌で作る味噌汁を作って、イベントやワークショップ等で水の良さを伝播していくことになりました。水の企業や、味噌屋と相談をする中で、近年の麹ブームもあるので、甘酒も一緒に作って提供していくことになりました。

▼連携

水を軸として産官と連携体制を構築しました。

<企業>

- ・富士ミネラルウォーター（採水企業）
- ・五味醤油（味噌、麴屋）
- ・カモスキッチン（甘酒スタンド）

<自治体>

- ・富士吉田市ふるさと納税推進室（米の提供）
- ・富士吉田市富士山課（イベントの場を提供）

▼生徒の取り組み

生徒とどう水の良さを伝えるか、10回の講座を開催しました。

1. 水の良さを知る（富士ミネラルウォーターの話聞く）
2. 水の良さを知る（味噌屋の話聞く）
3. 水の良さを伝える方法を考える（参考事例集め）
4. 水の良さを伝える方法を考える（水の資料収集）
5. 水の良さを形を考える（ワークショップを通じたアイディアソン）
6. 水の良さを形にする（出たアイディアの中からプロトタイプ）
7. 水の良さを形にする（役割を分担して、協力して作成）
8. 水の良さを伝えてみる（製作したツールを使って実践練習）
9. 水の良さを伝えてみる（製作したツールを使ってイベント出店）
10. 水の良さを考え直す（リフレクション）

▼事業を通じた生徒の変化

今まで当たり前身の回りであった水を通して、地域の良さを再発見できました。それはイベントを通じて、多くの人に「おいしい」「いいね」という声をいただき、実際に生徒がその声を聞いて、小さな成功を感じることができたからかと思います。2018年10月6日、7日に富士吉田市のイベントに参加し、甘酒を販売、試飲提供を行った際には500名の方に試飲していただき、500名の方と交流を持つことができたという経験は生徒たちにとって貴重な経験になりました。交流していく中で、自分なりに水をさらに調べたり甘酒の効能を考え直したりと、より自分から主体的に学ぶようになりました。



図1：水の良さを知る



図2：甘酒試作風景



図3：水の良さを伝えるプロダクト



図4：試飲風景

▼ネクストゴール

いただいた意見の中から「普段はどこで売ってるの?」という声を多数いただきました。その声を聞いた生徒たちがなんとか製品化していきたいという思いを持ち、製品化するために活動を始めました。今後のゴールは2019年度に製品化して、地域の新しいお土産として販売できるように形にしていきたいと息巻いています。

5. おわりに

これから人口減少社会が進み、AI化が進み、誰も何も予想できない時代がもうすでに始まっています。そんな時代をこれから生き抜いていく今の生徒たちには、納得できる正解を自分たちで作り上げ、新しい価値を生み出していく、それを支えられるリテラシーが必要になってきます。文科省が明治維新以来の革命が起きていると声を上げて危機感を持って取り組んでいる教育改革を、現場でそれぞれの地域、学校の強みを活かしながら生徒たちと向き合っていく時なのかなと思います。

かえる舎はこれからも地域の未来、生徒の未来に向けて取り組んでいきたいと思っています。そのためには、学校、自治体、地域の企業の方々のご理解、ご協力がないと成り立ちません。地域の未来、子供達の学習環境の充実のため、手を取り合い、協力関係を作りながら、より一層、進めていけたらと思います。